

第5回沖繩宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会 応答② 外間さんの発題を受けて

三村 修

初めに、昨日の、「構造的差別の自覚がありますか」という問いに応答するところから始めたいと思います。

これまで、外間さんの問いに沈黙してしまう、ということが何度かありました。そのとき、私の頭の中は真っ白になっています。そのとき、何を語っても、その言葉がウソになってしまいそうな恐れを感じています。

「痛くもかゆくもない差別の仕組み」の中に、どっぷりと浸かって私は生きています。そのことを自覚するときに、私は、どこからともなく「あなたは存在してはならない」という言葉を聞いてしまうのだと思います。「自覚しています」と言葉にすること、私がここに存在することが矛盾して、何も答えられなくなっている、というのが、私の中に起きていることだ、と今朝気が付きました。

「素晴らしい言葉（神学）のやりとりだけでは意味がない」と外間さんは、おっしゃっています。私もその通りだと思います。

これまでの、沖繩宣教研究所と、富坂キリスト教センターの共同の研修会で学んだことの一つは、沖繩宣教研究所が、沖繩の苦難の現実と、聖書の使信の関連性を言葉で表現しようとしてきた努力です。それは沖繩の現実の中で働く神様の業を言葉にする努力、すなわち神学であり、そこには言葉への信頼があります。

この研修会には、日本基督教団以外の方も含む研修会なので、日本基督教団の中で言われている「合同とらえなおし」について、歴史的な経緯をふり返りながら、私自身の歩みも含めて、お話ししたいと思います。

日本基督教団は1941年に創立、敗戦後、沖繩の教会への関心を払うことなく継続、一方、沖繩では信徒を中心として1946年に沖繩キリスト教連盟が組織され、それが後に沖繩キリスト教会（1950年）、沖繩キリスト教団（1957年）と改称。1968年に日本基督教団と沖繩キリスト教団がそれぞれに教団合同を可決、1969年に日本基督教団沖繩教区が設立されました。

ちなみに私はこの時、教会付属の幼稚園に通っていました。1972年5月15日の沖繩施政権の日本への返還の時、私は小学校2年生でした。1973年から74年

にかけて、『走れ!ケー 100』というテレビドラマがありました。道路を走る蒸気機関車が鹿児島を出発して夕張へ、夕張から沖縄へと旅する物語りを、わくわくしながら見ていました。

沖縄返還に先立つ「合同」が、合同にふさわしいものではなかったため、1978年の第20回教団総会に「日本基督教団と沖縄キリスト教団との合同とらえなおしと実質化の推進に関する件」が提案され、可決されました。

私は人生で何度か無職時代を経験しますが、その無職の私を私が当時通っていた教会はありのままに受け入れてくれました。その経験もあって牧師への道を選び、日本聖書神学校に入学したのは1990年でした。

神学校では、教団の教憲・成立の沿革・信仰告白・創立記念日・教団名称などについて、「合同とらえなおし」の問題として、習いました。同級生に上地武さんがいました。神学校の礼拝で沖縄の歌をみんなで歌うことがありました。彼が三線をひいてくれました。沖縄の歌を、ただそれが美しいからというだけでは歌えません。沖縄の歴史や文化について、彼に話をしてもらい、それから歌ったことを覚えています。

神学校卒業後、私は伝道師として二年間東京の教会で働きました。伝道師として働きながら、教会の中にいることに息苦しさを覚えていたので旅に出ました。

バングラデシュのテゼ共同体で4か月を過ごし、スコットランドのアイオナ共同体を訪ね、スイスのエキュメニカル研究所で、35か国から集まった48人の学生たちと共に学び、フィリピンのキリスト教基礎共同体を訪ね、97年の11月に、旅人として、佐渡が島にたどり着きました。当時無牧だった佐渡教会の牧師館で、旅人として滞在したのが、佐渡教会との出会いでした。

旅をして気が付いたことは、日本のキリスト教の特殊性でした。多くの場合、自分自身がキリスト教徒であることと、自分自身の民族性や地域性が結びついているのですが、私が知っている日本のキリスト教は、個人の宗教とみなされています。

もう一つあります。私が知っている日本基督教団は自己理解が明確ではない教会だということです。聖餐式や握手礼について、その意味について議論されることよりも、いままでやってきたやり方が、いままでこうやってきたから、それが規則だから、という理由で権威をもってしまうのが日本基督教団です。

日本基督教団に牧師として留まるということは、その自己理解の不明確な教会に人を引き込む働きをすることになります。日本基督教団の牧師になるか、やめるかを悩んでいたのですが、佐渡教会に集う人たちとの出会いと、当時、佐渡教

会の礼拝堂に置かれていた赤岩栄の『キリスト教脱出記』を読んだことがきっかけとなって、牧師への道が続けることを選びました。キリスト教脱出記は、キリスト教という宗教を脱出して、自立的連带的に生きる命、つまり、福音へと招く本です。そして、無牧時代を何度も経験していた佐渡教会の信徒は、自立的連带的に生きているように、私には見えました。

離島の無牧の教会に、新潟地区の牧師たちが毎週交代で説教に来ていました。新潟地区23教会・伝道所、そして、敬和学園高校・大学からなっています。新潟は自然災害多発県です。豪雨、豪雪、中越沖地震、中越地震・・・「にいがたがいに」というのが合言葉でした。

日本基督教団の中では、聖餐式に、バプテスマを受けていない人も陪餐できるのかどうか、というのが、一つの大きな課題になっていますが、日本基督教団で最初に公の場で問題提起をしたのが、佐渡教会の木村栄寿牧師でした（『基督教新聞』1963年9月7日）。

私の前の前の牧師は、ヤスクニ・天皇制・大嘗祭の問題について、取り組んでおられた角田三郎牧師でした（1985-1982年）。角田牧師から、新潟地区内でもかつて聖餐式のあり方について議論があったが、議論を続けると地区の連帯を壊してしまうので、議論をしないことになった、と私は聞きました。小さな教会の多い新潟地区にとっては、聖餐式について議論することよりも、地区教会の連帯を大切にしたのです。

自立と連帯を生きようとしている佐渡教会の信徒、そして、連帯性を大切にしている新潟地区の牧師、教会と出会った私は、当時公募していた佐渡教会の牧師に応募し、98年の9月に招聘を受けました。

佐渡教会は関東教区に所属しています。関東教区は新潟、群馬、栃木、埼玉、茨城の約150教会・伝道所からなっています。

関東教区は「沖縄キリスト教団と日本基督教団の合同とらえなおしと実質化」を受けとめ、6回にわたる沖縄現地研修を重ね、取り組んできましたが、「とらえなおし」よりも「実質化」の議論が深められました。

第30回教団（合同後第15回）総会（1966年）に沖縄教区から「教団名称変更議案」が出されたとき、関東教区は、各教区・教会・伝道所への主体的取り組みを求めるものとして受け止め、第31回教団（合同後第16回）総会（1998年）に「日本キリスト教団に名称を変更する件」を提案し、併せて「沖縄の諸教会に対する謝罪表明」（第48総会期第3回常置委員会可決）を可決、第49回総会で改めて「沖

縄の教会への関東教区の罪責と謝罪表明」を可決し、「日本基督教団罪責告白検討」委員会を設けました。関東教区においては、「合同とらえなおしと実質化」の問いは、日本基督教団の自己理解を深め、言葉にしてゆく契機となりました。

ところが、2002年10月の第33回教団（合同後第18回）総会は合同とらえなおし関連議案を審議未了廃案とし、沖縄教区はその後教団と距離をおき、教団との公的な対話を中断しました。

その一方で、関東教区の「日本基督教団罪責告白検討」委員会の取り組みと議論は続き、第63回教区総会（2013年）で教区「日本基督教団罪責告白」に関する件が決議されました。

関東教区は、「合同とらえなおしと実質化」の議論の中から、日本基督教団の成立時から戦後にいたるまでの「教区、教団の罪責」の問題に目を向けるようになり、そこから、さらに日本基督教団の過去の過ちをもう一度明確にし、このような過ちを繰り返さないため、また、罪責告白に立った真の合同教会形成への歩みを始めるための取り組みを続けました。それは、自分たちの足もとで起きたこと、起きていることを福音と関連付けながら言葉にしていく神学的努力だったと思います。

その言葉は、関東教区「日本基督教団罪責告白・リタニー」としてまとめられ、各個教会で学びのテキストとして用いられ、また教区内教会の平和聖日の祈りとして用いられています。

以上、外間さんの問い「なぜ、共通の祈禱課題にならないのか」という問いかけに対して、関東教区での、共通の祈禱課題にしていく取り組みについて、お話しさせていただきました。

次に独立論について、短くお話しさせていただきます。今、日本基督教団沖縄教区は、日本基督教団と距離を置く、という決断をなさっています。沖縄独立というのは、沖縄教区が日本基督教団に対して距離をおくように、沖縄が日本に対して距離をおく、ということだと思っています。

私はこれまで、自分の人生の中で、誰かと距離を置くという決断をしたことがありませんでした。また、怒る、ということも実は苦手です。なんとなく距離ができて離れるということはありませんでした。あえて誰かと距離を置くということは、主体的決断だと思っています。

距離をおく、という決断ができるほどの主体性を確立すること、また自分自身の中の怒りを許すことは私自身の、個人的なこれからの課題です。そして、私のような課題を抱えている日本人は少なくないでしょう。私が独立すること、怒る

ことと、日本の独立、沖縄依存からの独立、対米従属からの独立とは結びついて
いると思います。

最後に、これまでの研修を通して、私自身がどう変わったか、ということをお
話しさせていただきます。

私が教区総会で発言するようになりました。なんでもないことのように思える
かもしれませんが、300人近く集まる会議の中で発言するというのも勇気がい
ります。それは私自身の自立、独立の課題です。

2022年の関東教区総会は按手礼について議論されました。私は議案に対する
修正案を出そうとしていました。それは実現しませんでした。按手礼の意味に踏
み込んで、教区総会という公の場で議論できたことに、私は意味を感じています。
投票になれば、負けるとしても、どれだけ、内容のある議論を議事録に残せるか、
ということが大事であると思っています。

私が教区総会で発言した、というのは、教区内の世代交代が進んで、かつて
発言していた人たちがいなくなってきた、ということもあります。新潟地区内で、
私が最古参になってきました。ランクが高くなっています。ランクを振り払うこ
とはできません。ランクは力です。与えられている力を適切に用いることは、神
様から与えられている私の使命です。

関東教区が進めてきたかつての神学的取り組みをどう次世代に伝えていくかを
私も考える年齢になってきました。

初めにお話ししたことを、引用します。

「これまでの研修会で学んだことの一つは、沖縄宣教研究所が、沖縄の苦難の現
実と、聖書の使信の関連性を言葉で表現しようとしてきた努力です。それは沖縄
の現実の中で働く神様の業を言葉にする努力、すなわち神学であり、そこには言
葉への信頼があります」と初めにお話ししました。

もし、わたしが自分の足もとの現実の中で働く神様の業を言葉にする努力を怠
るなら、私の言葉は、いつでも「意味のない立派な神学のおしゃべり」になっ
ていきます。

足もとの現実の中で働く神様の業を言葉にする努力の一つとして、2018年から、
新潟地区内の牧師たちに呼びかけて、月に1回の自主的な勉強会を始めました。
説教塾、牧会塾というような名前も考えましたが、塾というと、偉い先生を中心
に集まるようなイメージがあるので塾にはしませんでした。新潟宣教研究所でも
よかったかもしれませんが、「新潟・神学ワークショップ」という名前にしました。

月に一回、現場の「困った」を持ち寄って、共感して、対策を練っています。

私が沖縄に来たのは、この共同研修の準備もかねて、関東教区の研修会に参加したのが最初でした。全国に点在する米軍基地が沖縄に集中するようになったこの構造的差別、構造的暴力について、その歴史について、それまでは紙に印刷された文字として、写真として、あるいは、モニターに映し出された映像として知っているだけでした。この研修を通して、沖縄のみなさんの肉声が、これまで単なる情報だったものに、いのちを吹き込んでくださいました。

最後に「教養」についてお話ししたいと思います。今回、応答の役割を与えられましたが、できることなら黙っていたい、隠れて生きていきたい、という気持ちがあります。しかし、作家、徐京植（ソ・キョンシク）は東京経済大学の学生に向けた講義のなかで、それを「反転したオプティミズム」だと批判しています。「外側で殺戮が行われていようが飢餓が進行していようが、内側だけを見て暮らしている。これは実は反転したオプティミズムです。この閉じこもっている自分の精神の外側にそういう事実が存在していても、それを見ないようにしている。それが平和だ、と。」「人間は徳と知を求めるとされてきたけれども、実はみずから進んで野蛮化・機械化する存在なのだという事なのです。しかしそれを放置していることはできない。そのために必要な教養とは、自分のいる場所を世界のなかで広くとらえる、歴史のなかでとらえることができる、内側と外側から見る事ができる、つまり他者の目から見る事ができる、ということです。」「(中略) そうでなければ、この現代という時代、つまりすでにロマン・ロランの時代、あるいはトーマス・マンの時代からなされていた警告が、まったく無意味なままに、あたりまえのように戦争が続いて行く、そういう時代に歯止めをかけることはできないのです。そのときに、わずかな精神の自由やみずからの個人的な良心を守るだけでは、もはや済まされない、そういうことが現代の教養に問われていることだと私は思います。」(徐京植「現代の教養とは何か」、加藤周一、ノーマ・フィールド、徐京植『教養の再生のために』東京、影書房、二〇〇五年、一六五 - 一六七頁)。本当の意味での教養を大切にしたいと私は思っています。

沖縄を犠牲にしたところで、日本の幸福、平和と安全があってはなりません。他者、沖縄、東アジアの犠牲の上に、日本人の生活があってはなりません。私としては、構造的差別、構造的暴力の問題に、沖縄のみなさんの肉声を聴かせていただきながら、これからも、共に取り組んでゆくことができればと願っています。